

飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

第 264 回 なさけにむくいる～情報

2008. 6. 29

我々の周辺には、「情報」という言葉が、あまりにも頻繁に使われている。お買得情報とか、個人情報、商品情報や IT（情報技術）とか。しかし、「情報」という言葉を正確に認識し、それなりに使いこなしているか…といえは、はなはだ怪しくなってくる。

情報という言葉は英語の information の訳語として明治時代に生まれた言葉である。福沢諭吉が「民情一新」という文章の中で始めて使用したという説と、森鷗外が考えた言葉という説がある。森鷗外の『論戦』は明治 34 年。福沢諭吉の「民情一新」は明治 12 年だが、「情報」という言葉は使われておらず、インフラルメーションと書いていたようだ。こうなると、そのどちらも疑わしい。

「情報」という言葉の初出は、明治 9 年に陸軍少佐酒井忠恕が訳出した『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』のようだ。フランス語 renseignement の訳語として「敵情を報知する」意味で最初に用いられたとする説（神戸大学『国際文化学研究』創刊号）が有力となっている。当時は特殊な用途での言葉であったと思われるが、現在では日常的に広範囲な場面で頻繁に使用される言葉である。

「情報」とひとくちでいうが、自分で調べた限り、その使われている意味も、概念も、その場面場面でマチマチのようだ。語源がどこにあるにせよ、「なさけ(情)にむくいる(報)」とはとてもいい言葉だ。そう、「情報」とは情けに報いるものでなければならない。

例えば、素材や資料のような普遍的な生の通知をデータ(data)と呼ぶ。人間が感知できるデータは視覚（光の明暗を感知）聴覚（空気の振動を感知）味覚（固体・液体の刺激を感知）嗅覚（気体の刺激を感知）触覚（モノに触れた感覚を感知）、いわゆる五感によるアンテナである。そして個人が特定の状況で判断・評価・解釈したモノを情報(information)と呼んでいる。その中で特に有益な情報を「知的情報」(intelligences)と呼び、知識や知性の源となるものである。アメリカの CIA (Central Intelligence Agency) の I である。そして、それら情報とデータを体系的にまとめ蓄積したモノが、知識(knowledge)となる。

こんな形で自分なりに整理してみた。溢れるほどのデータとインフォメーションを収集、精査し、限られた知的情報に醸成する。それを蓄積していく自分なりのプロセスを持つこと、これが情報化時代を生き抜く「知恵」かもしれない。

発信された情報を受信したものが理解してはじめてコミュニケーションは成立するのである。コミュニケーションとは一方通行ではなく、受信者が理解することが重要なのである。つまり、デジタル社会の中でうまくコミュニケーションを生成させるには、人間味がなければできないということに他ならない。

参考サイト：http://cookie.geijutsu.tsukuba.ac.jp/info_design/basic/tomorrow04.html

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~shu-sato/dc07.htm> <http://www.tbgu.ac.jp/cstt/kami/140501/info.html>

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1311403838